

## 巻頭言

「第26回リハビリテーション教育研究大会・教員研修会」の残したもの  
～大奮闘 大阪河崎リハビリテーションチーム～

大阪河崎リハビリテーション大学 副学長

寺 山 久美子

今年の夏日本列島は、連日熱中症の心配をする猛暑続きであった。そんな中の8月22日～24日に「第26回リハビリテーション教育研究大会・教員研修会」（一般社団法人全国リハビリテーション学校協会主催、会場—大阪国際交流センター、大会長—寺山久美子、テーマ—リハビリテーション教育改革の潮流の中で）は開催された。長年日本のリハビリテーション教育の舵取りをしてきた3団体（日本リハビリテーション学校協会、全国理学療法士・作業療法士学校連絡協議会、日本聴覚士養成校教員連絡協議会）が昨年平成24年に統合され「一般社団法人全国リハビリテーション学校協会」として発足したが、今大会は実質的には「統合後初の全国研究大会」といえる。準備担当は近畿ブロック、主管校は森ノ宮医療技術大学、阪奈中央リハビリテーション専門学校、そして我が大阪河崎リハビリテーション大学の3校と決まった。昨年の福岡大会での下見調査を皮切りに、3校から精鋭（？）教員が集まって準備委員会を結成し、本学高橋泰子氏を準備委員長に本格的な大会準備に取りかかった。最初の時期こそ調子が合わず「大丈夫か？」と一抹の不安を感じていたが、時と共にチームワークが出来るようになり、準備は加速していった。「チーム森ノ宮はプログラムと懇親会の企画担当」、「チーム阪奈は大会会場の運営」「チーム大阪河崎リハビリテーション大学は事務局を中心に財務、広報、ホームページ、機器展示、全体の進行管理と総括」と担当も明確となり、当日を迎えた。

結果は、「成功」といってよからうか。参加者507名、口述・ポスター発表124演題と昨年を大幅に上回り安堵した。また特別講演、教育講演、シンポジウム、懇親会とも参加者には大好評であった。採算的にも、大阪らしく（？）、しっかり黒字とは相成った。以上のような、本学にとっても筆者自身にとっても「暑い夏」ではあったが、エネルギーをつかった分、以下のような大きな収穫もあったと確信する：

1. 本学の「力と存在」を外部に示せたこと～本学から9演題の発表ができたことと、本学初の「予演会」が事前に実現できたこと。当日は当学の教職員挙げて大会運営にあたっていただけたこと。また、本学ホームページを通じて全国に向けて本大会及び本学の広報宣伝がかなったこと。
2. 本大会を通じて大阪を中心とするリハビリテーション教育機関との親しい交流ができたこと。
3. 大会の準備という大変な作業を通じて、結果的には、準備担当教員の一人一人が意外な（？）能力とスキルを発揮し、お互いの信頼と尊敬が高まったこと。
4. そして、こうした成果を上げることができた背景には、本大会の河崎・栗岡・清水特別顧問、山田・辻井・荻原顧問他からの心よりの支援があったことを実感できたこと。等であった。

今後、皆様にこうした「学術研究大会準備」というような裏方的な仕事きた時には、率先して参画して、能力とスキルの発揮、人々との交流を楽しんでいただきたい。仕事人生が一層輝くために。